

JICA 中国事務所ニュース 10月号

目次

【最近のトピックス】

- ◎ 10月1日、新JICA誕生！ 1
- ◎ 「友誼賞」を受賞して 2
- ◎ 2008年度のJICA理事長賞に中国から4件が決定！ 3
- ◎ 「竹田高校で講演してもらえないか」 4

【ニュース】

- 子供達の笑顔を支えたい！ ～四川復興支援ツアー 5
- 中国青年指導幹部研修(青年研修)で90名が訪日！ 6
- フォローアップ研修「日中共同CDMセミナー」@新疆 6
- シニア海外ボランティアの活動を終えて 6
- 青年海外協力隊員とシニア海外ボランティアが到着しました！ 7

【人の動き・主要行事】 7

【寄稿コーナー】 8

【帰・赴任者紹介コーナー】 9

最近のトピックス

◎ 10月1日、新JICA誕生！



ロゴも新しくなりました

10月1日、国際協力機構(JICA)と国際協力銀行(JBIC)の経済協力部門(有償資金協力事業)がついに統合しました。また、この統合を機に、従来外務省が実施していた無償資金協力事業の大部分もJICAに移管され、JICAは、技術協力・有償資金協力・無償資

金協力、3つの援助手法を一体的に担うODA実施機関として新たに出発しました。この統合により、職員は、全世界で約1,660人、年間予算規模は約1兆300億円(2008年度予算ベース)となり、援助規模としては世界最大級の援助実施機関となりました。

なお、新生JICAでは、新たな体制と組織文化の創造を目指し、これまでのシンボルデザインを改定しました。新しいJICAのシンボルデザインには、以前のシンボルデザインに、組織の活発な動きや新たに「円弧」のモチーフを追加したものです。円弧のモチーフはJICAロゴに始まりJICAロゴに戻ることで、組織の活発な動きと共に、「持続可能な開発と発展」などを表現しており、また、新たに「J」に架かる円を赤い色とし、「地球＝世界」にあわせて「日本」をイメージできるようにしていま

す。

今後、新しい JICA は、「全ての人々が恩恵を受ける、ダイナミックな開発 (Inclusive and Dynamic Development) というビジョンを掲げ、開発途上国の人々のニーズにより合致する、これまで以上に質の高い国際協力事業の実現に努力していく方向であり、これを達成するために、①包括的な支援、②連続的な支援、③開発パートナーシップの推進、④研究機能と対外発信の強化、という4つの戦略によって、①グローバル化に伴う課題への対応、②公正な成長と貧困削減、③ガバナンスの改善、④人間の安全保障の実現、の4つの使命(ミッション)を実現すべく、職員が一丸となって努力していく所存です。

(総務班 植村吏香)

◎ 「友誼賞」を受賞して



人民大会堂での祝賀晩餐会に出席しました

今回、図らずも中国政府から 2008 年「友誼賞」を受賞しました。

「友誼賞」は中国政府が、中国の社会開発・経済発展等に貢献した外国人専門家に授与する最高の賞と言われており、私個人としては相応しくないと考えておりますが、私が 2001 年 9 月から 2004 年 9 月まで「日中協力林木育種科学技術センター計画」(湖北省)の、またその後、2004 年 11 月から 2007 年 10 月まで「日中林業生態研修センター計画」(北京市)の首席顧問として二つの JICA プロジェクトの推進に貢献したとのことであり、この二つの JICA プロジェクトが日中専門家の密接な協力と関係機関の支援により、良い

成果を上げていることが評価されたとの理解です。ありがたく賞を頂くことにしました。

北京市にある上記の JICA 林業プロジェクトの中国側機関は国家林業局管理幹部学院です。今回の私の受賞は、この管理幹部学院が国家林業局に推薦し、国家林業局が友誼賞選定委員会に推薦して決定をみたとのことで、9 月 9 日に管理幹部学院から日本の自宅にいた私に突然電話連絡があり、9 月末の北京での授与式に出席するようにとのことでしたので、急遽、飛行機の席を取って出かけました。

授与式は 9 月 27 日に人民大会堂で行われました。中国政府の張徳江副総理及び中国政治協商会議の白立忱副主席が 50 名の受賞者 1 名毎に「友誼賞楯及び友誼賞メダル」を授与し、握手し写真撮影しました。中国中央テレビはこれを取材しニュースで流しました。

また、9 月 29 日には同じく人民大会堂で、温家宝総理との面会と記念撮影が行われました。温家宝総理は、「毎年この授与式に出席して外国人専門家に会うのを楽しみにしており、皆さんの貢献に心から感謝します」と話されました。温家宝総理の写真は新聞等でよく見ていましたが、実際に近くでお会いすると温和な田舎の村長さんという感じでした。

この日には、人民大会堂の 2 階大宴会場で温家宝総理主催による中華人民共和國成立 59 周年祝賀晩餐会が行われ、友誼賞受賞者全員が招待されました。209 の円卓が並び約 1700 名が参加した大宴会でした。第 1 卓には胡錦濤国家主席をはじめ中国共産党及び中国政府の指導者が座りました。人民解放軍の軍楽隊による中国国歌の演奏そして温家宝総理の開宴あいさつで宴会がはじまり、中華料理のフルコースが出されました。私は第 162 卓に座りましたので、第 1 卓の要人ははるかかなたで見えませんでした。この祝賀会の様子は 9 月 30 日付けの人民日報 1 面に第 1 卓の写真とともに出ていました。

荣誉ある「友誼賞」を受賞したのは、二

つのプロジェクトで働いた日中専門家の努力と支援してくれました JICA はじめ関係機関の賜物であり心から感謝してご報告といたします。ありがとうございました。

(前 JICA 日中林業生態研修センター計画
首席顧問 宇津木嘉夫)

◎ 2008 年度の JICA 理事長賞に中国から 4 件が決定!



緒方理事長と受賞者の皆さん

(緒方理事長から左に2人おいて河村さん、真後ろが森貞さん)

JICA では世界各国で実施している協力事業の実施にあたり、非常に貢献度が高い方や長年にわたって協力を携わっていただいた個人や団体などを讃えるために、毎年、理事長による表彰を行っています。今年は、中国において JICA 事業に携わってきていただいた下記の方々(個人3名、団体1件)について、理事長表彰の対象となることが決定し、現在日本在住の森貞芳子氏及び河村嘉一郎氏が、先日、東京で開催された表彰式及び懇親会に出席されました。

森貞氏は 1988 年から 2006 年までの間、継続的に 5 つの技術協力プロジェクトの業務調整員として携わってこられ、各プロジェクトの成功に多大な貢献をしてこられました。また、河村氏は、1994 年から湖北省林木育種計画プロジェクトに携わられ、計約 10 年にわたり、同プロジェクトにおける林木育種事業の発展に大きく貢献されました。

また、中国国内では、これまで約 20 数年間にわたって JICA との協力活動を行っていただいた中日友好病院外事処の尹勇鉄処長と、1986 年に派遣が開始された青年海外協力隊員の現地語学訓練を担当していただい

た世青中学が表彰対象となりました。

皆さん方の受賞にあたってのコメントは次の通りです。

* 森貞芳子氏:

緒方理事長より賞状を手渡されたとき、1988 年から 2005 年まで JICA のプロジェクト業務調整として共に働いた日中専門家との日々が脳裏に蘇り、この賞の重さを実感しました。業務調整の仕事の結果は専門家成果の中に、プロジェクトの成果の中にあります。多くの人たちと支え合いながら共に一つの目標に向かっていくこの仕事が好きでした。このような機会をくださった JICA に、私が出会った全ての方々へ心より感謝をいたします。(森貞 芳子)

* 河村嘉一郎氏:

このたび、栄誉ある JICA 理事長表彰をさずかり、身に余る光栄に心から感謝しています。関係各位の皆様へ衷心より御礼申し上げます。当方、1994 年 10 月から 2007 年 10 月までの 13 年間、武漢市において「日本の林木育種技術を中国に移転する」プロ技に係らせて頂きました。この間に移転した育種技術、機器類、人材等が遺伝的により、すぐれた優良形質木の種子からの苗木で中国の植林事業に生かされることを祈念しています。(河村嘉一郎)

* 中日友好病院外事処・尹勇鉄処長:



理事長賞を受賞した尹勇鉄処長(写真中央)

今回、JICA 理事長表彰をいただきまして、何よりの光栄と存じます。この場を借りて、感謝の意を申し上げます。

中日友好病院は日本政府の無償資金援助により、1984年建てられて以来、もう24年の月日が立ちました。中日両国政府は中日友好病院の発展に全精力を注ぎ、今となっては中日両国人民の友好のシンボルとして、中国で屈指の大型総合病院までの成長を遂げました。JICAをはじめ、社会各界のご支援・ご鞭撻がなければ、中日友好病院の今日がないと言っても過言ではありません。

ということで、今回の表彰は、私尹勇鉄一人に与えた表彰ではなく、中日友好病院の成長に力を貢献して下さった歴代の病院経営陣、外事処の先輩たち及び現在第一線で仕事を励んでいる外事処の全員に与えた表彰と存じます。栄光は我らにあり！

私は今回の表彰を再出発の原動力と見なし、これからも中日友好病院の国際交流事業に力を尽くして参りたいと存じます。JICAと日本各界の見守るなか、中日友好病院の未来が明るく輝いていると確信しております。（尹勇鉄）

* 世青中学：



20年度2次隊現地語学訓練終了時評価会の際に表彰を受けた世青中学の先生方(左から趙大倫、趙怡芳、王虹校長、山浦所長、何濟平、李運絹先生)

私ども世青中学校は、幸いにも1986年12月に中国へ初めて協力隊員が派遣されたときからこの業務を担当し、これまでに22年間にわたって不断の努力を重ねつつ、ボランティアの皆さんに最も適切な教授法と学習内容を提供することを主眼に、現地語学訓練を担当して参りました。毎回新しい隊員がやってくるごとにその隊次の特徴に合わせてカリキュラムを調整した

り、隊員活動の状況の変化に合わせて教材の再編成や改定を行いながら、ボランティアの皆さんが当校において正しく実用的な中国語を学んでいただけるように、また同時に、ボランティアの皆さんが心身共にこの北京での短い訓練生活を楽しんでいただけるようにサポートをしてきました。

日本国際協力機構が私達にこの仕事を任せていただいたことに大変感謝しております。また、22年間にわたって当校との協力を担当して下さったJICA中国事務所のスタッフの皆様や、過去及び現在にわたり各地で中国の発展のために力を尽くして下さってきた総勢667名のボランティアの皆様にも感謝しなければなりません。

教育者として、私達のこの仕事は非常に有意義なものです。中日友好関係の更なる発展のために微力ながらも貢献することができ、私達はこの上なく光栄に感じております。今後とも引き続き新ボランティアの現地語学訓練を担当させていただき、この事業のために更なる貢献をしていきたいと願っております。

(世青中学校長/王虹)

◎ 「竹田高校で講演してもらえないか」



竹田高校の生徒達に囲まれた竹内職員

大分県立竹田高校の3年学年主任のK先生から1通のメールが届きました。

大分県、竹田高校、K先生…全てに自分との接点を見出すことができませんでしたが、聞けば小職が大学時代に在籍していたポート部の先輩との会話で私の名前が出たとのことでした。

事態が飲み込めず、「中国に駐在しているので残念ながら竹田高校に伺うのは難しいです」と回答しようと思っていた矢先、K先生から新たなメールが届きました。「生徒達に刺激を与えて欲しい。中国にいるのは分かっているが、無理を承知でお願いしたい。私は生徒に対し『願わなければ適わない』と教えている。この想いが伝わると信じています。」・・・あ、熱い。負けました。『願わなければ適わない』・・・この言葉に導かれ、2008年9月22日、未踏の地『大分県竹田市』に足を踏み入れました。

滝廉太郎の「荒城の月」の町として有名な竹田市。この町にある「大分県立竹田高校」は100年以上の歴史を有する進学校です。K先生により『Light the heart “心に火をつけろ”』というとんでもない講演タイトルが命名され、サブタイトルは『17歳の私から今の私へ』に。聴衆は竹田高校の全校生徒、教職員、そして父兄の方々約600名。

私達も経験しましたが、『17歳＝高校3年生』は進路や就職が目前に迫る重要な時期です。講演では、17歳の「私」から、国際協力の現場で働く「私」までを、自身の経験や考えを織り交ぜつつ伝えました。その後、質疑応

答・感想発言の時間になり、多くの質問や感想を聞かせて頂くことができました。

「今の夢は何ですか」「国際協力に係る仕事に従事したいのですがどうしたらよいですか」という質問や、「これまでに何人の命を救いましたか」というかなり回答に窮する質問も飛び出しました。

先日、講演を聴いてくれた竹田高校の全校生徒一人一人から手紙が届きました。全てを読むには時間がかかりますが、時間を見つけて全員に返事を書きたいと考えています。この手紙は私の宝物です。

「願わなければ適わない」この言葉から始まった今回の講演は、私自身の心に大きな火をつけてくれました。今日も仕事を頑張れそうです。

講演の際に生徒から受けた質問「今の夢はなんですか」。

私は何と答えたのでしょうか。実はよく覚えていません。

ただ、生徒からもらった手紙を読み返し、今この原稿を書きながら、私は思います。「私の夢は、将来皆さんと世界のどこかで働くことです。」（円借款班 竹内和夫）

ニュース

■ 子供達の笑顔を支えたい！

～四川復興支援ツアー

9月23日、四川省復興支援促進のために商務部が組織したドナーツアーへ参加するべく、成都空港へ戻ってきました。今回の視察先は奇しくも4ヶ月前に日本の国際緊急援助隊救助チームとともに訪れた北川県と青川県です。最初の目的地である北川県は豪雨によるがけ崩れで行く手を阻まれ、青川県へ向かいました。

青川県の市街地に入ると、成都近郊に比べて倒壊物件の撤去を含めたインフラ復興が遅れている様子が確認されました。一方で



青川県の子供たち。明るい笑顔を支えたいです。

喬庄鎮中学校の仮設教室を覗いてみると・・・被災地であることを忘れさせるような子供達の弾ける笑顔に迎えられました。元々子供好きな私は幸せな気持ちで学校をあとにしましたが、北京へ戻り現場で入手した発災直後

の壮絶な記録映像資料を見て、現場の子供達に「見えない心の傷」があることを感覚的に知ることとなりました。JICAでは街づくりと心のケアの分野で復興支援に向けた取り組みを推進すべく計画を進めています。

(業務次長 藤本正也)

■ 中国青年指導幹部研修(青年研修)で90名が訪日

中国共産党若手幹部を対象として日本への理解を促進する平成20年度「中国中央党校訪日研修団」(団長・李景田中央党校副校長)一行90名が10月22日から日本を訪問し、日本側関係者との意見交換や施設見学などを通じて見聞を深める予定です。この訪日団は、主に各中央官庁の司長・局長クラスの幹部や国有企業の取締役、有名な大学の校長等で構成されており、参加者は、将来中国国内の社会・経済面で重要な役割を担うことが期待されています。

「中国共産党中央党校」は同党幹部の研修機関として知られており、1993年10月から2003年10月までの10年間、胡錦濤国家主席が校長を務めていたことでも知られています。今回の訪日研修参加者は同校で長期研修中の中央・地方の政府機関等の若手幹部で、兵庫での合同研修の後、分野別(地方開発、行政、環境)に別れ、北海道、兵庫、福岡を視察します。

(総務班 植村吏香)

■ フォローアップ研修「日中共同CDMセミナー」@新疆

JICA国別研修「中国気候変動、CDMに関する日中関連政策研修」(2006~2007)に対するフォローアップ事業として、9月16日から19日にかけて、新疆ウルムチ市で「日中共同CDMセミナー」が開催されました。

この事業は、訪日研修に参加した新疆リモートセンシングセンター夏黎主任を始めとする新疆出身の帰国研修生の活動を支援するために実施されたもので、彼らがセミナー講

師となり、訪日研修で学んだ成果、CDMの基礎情報、新疆CDM事業の現状などについて発表し、JICA支援に対する感謝の意が表されました。



セミナーで発言する筆者(左端し)

本セミナーには、新疆ウイグル自治区各地の科技局局長らなどあわせて約60名が参加していましたが、最終日には、彼らから既存のプロジェクトやこれから実施しようとしているプロジェクトをCDM化するにはどうすればよいかなど具体的なかつ実務的な質問が多く出され、4時間以上に及ぶ日本人専門家との質疑応答がなされました。研修全体を通じて、石炭、風力、石油など天然資源の豊富な新疆におけるCDM優良案件の潜在性とCDM事業化に対する地方行政官の関心の高さがうかがえました。(業務班 長安美恵)

■ シニア海外ボランティアの活動を終えて

私は2006年10月から2008年10月7日まで、企業診断士として広西生産力促進センター(広西壮族自治区南寧市)外聯培訓部に配属され、中小企業の振興およびその生産性向上のために人材育成や企業診断などを行ってきました。嬉しくも、この活動は柳州新聞、広西科技信息网、桂林電視台、北海電視台、南寧科技網などの各種メディアでも紹介されました。

やってきたことのすべては、①5S(整理、整頓、清掃、清潔、躰)②PDCA(Plan, Do, Check, Action)に集約されます。

誰でも知っている、非常にシンプルで、当たり前の概念です。しかし、人、物、金、情報

といった経営資源の脆弱な日本を含むおそらく世界中の中小企業にとっては、このあたりまえのことができていない場合が多いのです。広西企業を15社近く訪問しましたが、やはり中国も例外ではありませんでした。



中国企業で経営指導の様子

これまで、私自身難解なMBAの横文字用語を振りかざして、枝葉末節にこだわり、いくるめてきたところもあると反省していますが、まずはこの二つの基本的なことをしっかりとシステムとして確立することが中小企業振興およびその生産性の向上にとって重要なのではないかと今、確信しています。

さらには、2年間の広西での活動で中国企業や配属先の皆さんから「攻めの経営」からくるエネルギーとパワーをいただいたおかげで、「やっぱりこの仕事はおもしろいな」と改めて思うようになりました。

今後は、中国での貴重な経験を活かし、自分の専門分野にさらに磨きをかけ、微力ながら日本の中小企業の振興に役立てればと考えています。

(シニア海外ボランティア 須賀俊幸企業診断士)

■ 青年海外協力隊員とシニア海外ボランティアが到着しました！

今月6日に、青年海外協力隊及びシニアボランティア(20年度2次隊)が無事到着しました。北京で3週間の現地訓練の後、各配

属先へ赴任となります。

活動期間は2010年10月までの2年間。配属先はもちろん、地域での活躍が熱烈に期待されています。

なお、現在活動中の隊員の様子は JICA 中国事務所ホームページのボランティアページをご覧ください。

(ボランティア班 鈴木大介)



左から 梶原SV、鈴木、酒見、松葉、寺井隊員

■シニア海外ボランティア(SV)

- ・ 梶原隆博 金融サービス
(湖南省 湖南涉外经济学院)

■青年海外協力隊

- ・ 鈴木純 環境教育
(河北省承德市豊寧满族自治县林业局)
- ・ 酒見志奈子 日本語教師
(新疆自治区 新疆师范大学)
- ・ 松葉久美子 日本語教師
(吉林省 永吉県朝鮮族第一中学)
- ・ 寺井美香 日本語教師
(湖南省 吉首大学外国語学院)

人の動き

主要行事

(1)主な調査団(派遣中・派遣予定)(10月)

- ・ 税務行政管理プロジェクト事前評価調

査(19-22)

- ・ 感染症対策プロジェクト形成調査団

(10/26~11/15)

- ・安全生産科学プロジェクト中間評価調査(10/19-11/1)
- ・貴州省フツ素症対策機材整備計画 F/U調査(10/27-11/15)
- ・貴州省道真県・雷山県住民参加型総合貧困対策モデルプロジェクト終了時評価(11/6-18)

(2) 10月の主要行事

- ・青年研修訪日(経済、地域振興、教育、環境行政)(10/21)
- ・中国青年指導幹部研修訪日(10/22)
- ・中国リハビリテーション研究センター20周年記念行事(10/28)

寄稿 コーナー

JICA 本部の印象

9月10日から27日までの2週間ほど、JICA 本部東・中央アジア部の東アジア課に業務出張しました。私自身は本部へのお出張は初めてのことで、来年度の中国新規案件の要望調査業務の調整、案件形成業務のサポート及び日常一般事務の支援を行うことが今回出張の目的です。

初めての本部出張であるだけに新鮮感に溢れ、わくわくした毎日を過ごしました。特に要望調査に関しては、普段事務所の立場で要請書を見ていましたが、今度は本部の立場になってコメントをしなければなりません。そうすれば中国側のニーズや実施の妥当性を評価するだけでなく、日本側として案件採択に繋がる理由を明確にしなければなりません。日本側の理由を明確にするには日本国内のリソースや事業方針を把握しなければ書けませんので、苦心しました。幸い上司や先輩に親切に教えられながら、コメントや実施すべき業務をやり遂げました。

また、本部では、紙の無駄使いの予防を徹底していることを目にしました。必要のないプリントはしない、なるべく裏紙を使ってプリントしています。しかもすべて再生紙を使っています。本部の様子と中国事務所の現状を見比べると、まだまだ環境にやさしい事務所になるのには改善する余地があると思いました。所員の一人ひとりの努力によって、きっと無駄のない事務所となると信じています。

10月1日のJJ統合で新JICAがスタートした。今回の出張はちょうど統合する前の短期の業務出張であり、人手の足りない中で、バタバタとした毎日でした。職場の雰囲気をつかみながら、業務の流れにいち早く溶け込めるよう頑張っている内に帰国日が近づいてきました。忙しい業務の合間に一息抜いて初秋の富士山を訪ねました。今回の出張で大変良い経験をさせて頂きました。



初秋の富士山

(業務班 シン軍)

帰・赴任者紹介コーナー

(1) 事務所長 山浦信幸



9月20日に着任しました山浦(シャンプー)です。在外勤務はミャンマー、モロッコ、パキスタンに次いで4度目ですが、中国勤務は初めてで、これまでの国々とはずいぶん違っているなあというのが第一印象です。

まず、まだ市内しか知りませんが、高層でしかも床面積の広大なビルが多数聳え立ち、道路も6~10車線、大規模なショッピングモール、豊富な魚貝類、南方・北方の果物とその大きさ、多様性に戸惑っています。

またODA業務の上では日中友好病院をはじめ、息の長いプロジェクトが多く、関係者はそれぞれ日本語・中国語に堪能の方が揃っていて、中国側ともかなり日本語で話ができるのも初めての経験です。

このようなこれまでの日中の関係者の皆さんが築いてこられた成果とネットワークを大切にして環境分野や人的交流などを中心に引き続き事業に取り組んでいきたいと思えます。

加えて10月1日に円借款と無償資金協力も含めODAの総合的実施機関として新JICAが発足しました。これを契機に技術協力による人材育成と資金協力による施設整備などを有効に組み合わせた事業の取り組みも強化していきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

(JICA 中国事務所長 山浦信幸)

(2) 日本職員 倉科和子



9月19日に着任しました倉科和子です。中国に来たのはナント 17~18年ぶり。前は環保センターのプロジェクトを始める際の調査団でした。

すでに着任してから1カ月ですが、北京のあまりの変わりように、20年の時の流れと中国の力を感じる毎日です。

大学時代に勉強していた中国語もすっかり錆つき、今は生活と新しい仕事に慣れることで精一杯ですが、中国にいる間にできるだけ多くの現場を見、いろいろな方の話を聞き、様々な中国の姿を知りたいと思っています。

子ども3人と母を連れての初めての在外生活ですが、仕事も生活も「楽しく、元気に！」をモットーにやっていきたいと思えます。みなさん、よろしくお願ひします。

(業務班 倉科和子)

(3) 長期専門家 生方正俊

湖北省で12年間、安徽省で7年間にわたって行われた、林木育種関係のプロジェクトの専門家として2年間中国に滞在しました。「林木育種」とは、簡単に言うと植林に用いる苗木の品種改良を行うことです。プロジェクトにより、湖北省及び安徽省に、より成長が良く病虫害に強い性質を持った苗木を創り出すための基盤を整備することができました。これも今までプロジェクトに関わった多くの方々

のご努力によるものと思っています。

我々プロジェクトの専門家は、常に技術協力の最前線にいることを意識しながらの活動でしたが、中国事務所の方々(特にご担当いただいた皆さん)には、様々な面でお世話になりました。また、ご迷惑をおかけしたこともたびたびあったと思います。この場をお借りして御礼、お詫び申し上げます。



(長期専門家 生方正俊)

(4) 長期専門家 岡村政則

「日中協力林木育種科学技術センター計画」での1年間の長期専門家の任期を終えて10月17日に帰国します。

担当は、前任者に引き続き「安徽省松材線虫抵抗性育種センター」において「マツ材線虫病」に強いバビショウを作り出すための技術移転を行うことでした。カウンターパートの皆さんと一緒に現場での作業が多いプロジェクトでした。名刺にスペシャルなゼネラリスト

を掲げて技術移転をしましたが、反省点もありました。

延べ12年間実施されたこの関係のプロジェクトは終了します。まだ移転の必要な課題もありますが、今後、森林総合研究所林木育種センターとの共同研究を行う協定を結びましたので縁の切れることが無くお互いに仕事を進めて行くことが出来ます。

日本と同様に中国でも松枯れの被害は深刻な問題となっています。いろいろな防除対策が行われていますが、抵抗性を持ったバビショウも幅広く造林されることを楽しみにしております。

これまで長期専門家、短期専門家を合わせて3年4ヶ月間、中国で仕事をさせていただきました。その間、関係者の皆様には大変お世話になりましたことにお礼申し上げます。



(長期専門家 岡村政則)

=====
* 皆様からの情報提供、大歓迎です。また、本紙に対するご意見、ご提案などいただければ幸いです。いずれも中国事務所沈 暁静(shenxiaojing.cn@jica.go.jp)あてにお願いいたします。
=====

* その他お知らせ

JICAのホームページ: チャイナ ライブラリー (和文・中文)

> <http://www.jica.go.jp/china/library/news/index.html>

> <http://www.jica.go.jp/china/chinese/library/01.html>

チャイナ トピックス (和文・中文)

> <http://www.jica.go.jp/china/topics/index.html>

> <http://www.jica.go.jp/china/chinese/topics/index.html>